

資料紹介

新島八重の雑誌記事集成

山 梨 淳

新島襄の妻、八重（一八四五—一九三二）は、新島の没した一八九〇年から、彼女の最晩年に至る時期までの間、折に触れて活字化された談話を残している。これらの記事は、会津戊辰戦争の籠城に代表される自身の体験談を語ったものや、亡き夫や同志社関係者に関するものなど多岐に渡っているが、特に後者の関連記事は新島襄・同志社史研究において重要な資料であることに疑いは容れない。

八重の談話に関しては、昭和初年に『同志社新聞』に連載された彼女の「新島回想談」が、一九七三年に単行本『新島八重子回想録』として刊行され、^①その後も折に触れて様々な形で復刻が行われてきている。ただ、八重関連の記事の全てが復刻されたわけではなかったため、一般に読まれる機会の少ないものも存在しているのが実情である。本稿は、これら紹介される機会に恵まれなかった談話を含めて、約八編の記事を集成して復刻したものである。^②

なお、参考までに近年に復刻された文献をここに記すと、同志社社史資料室より刊行された『追悼集 同志社人物誌』には、八重の談話二編と、彼女の発言を収めた新島記念会の会合の記録が収録されている。^③また、研究誌においても、八重が新島没後に書きしるした「亡愛夫襄発病ノ覚」^④や、『新島八重子刀自懐古

談』（吉井昭文堂、一九三二年）の復刻が『同志社談叢』で行われている⁶。後者の文献を発掘した吉海直人氏は、『婦人世界』（第四卷、第一三三号、一九〇九年十一月）に掲載された「男装して会津城に入りたる当時の苦心」を『総合文化研究所紀要』（同志社女子大学総合文化研究所）に復刻している⁷。八重の談話や回想に関心を持つ読者は、本稿と併せて、これらの雑誌掲載の記事を参照願いたい。

資料は、発表年代順に配列している。復刻にあたっては、原則として、発表誌の表記に従っているが、適宜、表記を改めて、句読点を施し、明白な誤植に関しては訂正を行った。文中の「」を施した文言は、すべて補足訂正したものである。また、過去に一度復刻されたものに関しては、その校訂を参照させていた⁸いた。

〔解題〕

① 郇山人「新島襄先生未亡人を訪ふ」『女学雑誌』第三二〇号、一八九〇年七月五日、二二―二四頁。

明治時代、女権拡張の主張などで女性文化史上に大きな役割を果たした雑誌『女学雑誌』は、新島襄の教育事業に大きな関心を寄せていたが、同誌は、新島八重の談話も折に触れて掲載していた。「新島襄先生未亡人を訪ふ」は、当時、同志社神学校に在学中であった湯谷ゆや磋さいちろう一郎（紫苑、一八六四―一九四一）の執筆になる記事であり、著者名の「郇山人」は、彼の『女学雑誌』での筆名である。湯谷の『女学雑誌』への関わりは、一八八九年五月に彼が同誌に投稿した文章が寄書欄に採用された時に始まり、以後、彼は同誌に寄稿を継続していた。一八九一年に同志社を卒業後、湯谷は、女学雑誌社に入社して、編集に従事している⁹。

「新島襄先生未亡人を訪ふ」は、一八九〇年六月二十八日、同志社の学友二人と共に八重のもとを訪問し

た湯谷が、その訪問に関して『女学雑誌』に社外（当時）の人間として投稿した一文で、「雑録」欄に掲載された。新島の没後、疲労から健康を害していた八重は、この時期もまだ完全に回復していなかったために、湯谷は、彼の期待通りに話を伺うことはできなかった模様であるが、その談話の内容は、新島没後半年を経た時期の八重の心境の一端をよく伝えてある点で、貴重なものといえる。

②「新島襄先生未亡人の談話」『女学雑誌』第三三六号、一八九〇年十月二十五日、一五頁。第二三七号、一八九〇年十一月一日、一三頁。

同じく一八九〇年に『女学雑誌』に掲載されたものであるが、こちらは明治期の女性作家として知られる清水紫琴（本名とよ、一八六八—一九三三）の訪問記事である。⁹前書に「記者ふみ子」（生野ふみ子）による訪問記事と記されているが、この名は女学雑誌社に一八九〇年に入社した紫琴の『女学雑誌』上の筆名の一つである。

清水紫琴の父貞幹は、一八七〇年に京都府に出仕し、後、学校掛りや勸業掛りに任じられた人物である。紫琴や彼女の姉が京都府立女学校の前身である女紅場で学んでいたこともあり、清水一家は、八重が新島と結婚する以前から、山本覚馬・八重兄妹と知る機会を持っていたものと思われる。¹⁰

この談話は、確認出来る限り、八重による最初の主だった新島に関する回想であるが、冒頭に記されたように、紫琴のこの訪問は、新島の回想を伺うために行われたものではなく、他の「要談」の件で行われたものであり、この談話の記事自体はその副産物と呼べるものだった。¹¹東京婦人矯風会の一員であった紫琴は、当時、開院の近づいてきた帝国議会における女性の傍聴禁止規定案の撤回に向けて活動しており、この八重

訪問記事の掲載号の前号では、衆議院の女性傍聴禁止の非を訴えた彼女の名高い論説「泣いて愛する姉妹に告ぐ」が掲載されている。

東京婦人矯風会は、既に一九〇〇年八月、女性の政治参加を禁じる集会条例を問題視して請願を行っていたが、女性の衆議院傍聴禁止に關しても十月に陳情書を作成して、反対運動を展開していた。¹²⁾ この陳情書に署名した者は、矢島楫子、徳富久子・静子、湯浅初子、荻野ぎん、佐々城豊寿、清水とよ（紫琴）らである。八重の名前は、署名者の中にみられないが、紫琴の訪問は、時期的にみて、恐らくその署名の許諾を八重に求めるために行われたのではないかと思われる。

同年十二月十七日に、八重は、衆議院を佐々城豊寿と共に傍聴している。¹³⁾ 同月三日に婦人傍聴の禁止規定が撤廃された後、議会傍聴を望んだ豊寿は、その斡旋を板垣退助に依頼していたが、板垣の返事があまり当てにならないかったので、彼女はあらためて徳富蘇峰にこの件を頼み、彼の斡旋で豊寿と八重は、議事傍聴が可能となったという。¹⁴⁾

「新島襄先生未亡人の談話」では、「新島先生の傷痕」、「新島先生の結髪」、「新島先生幼児の約束」、「新島先生幼児の執拗」の四編の挿話が文語体で語られている。最後の「新島先生幼児の執拗」の内容は、他の八重の回想では語られていないものである。

なお、この談話は、古在由重編『紫琴全集』（草土文化、一九八三年）に所収されている。

③ 「新島夫人の看護談」『女学世界』第五卷、第八号、一九〇五年六月、一五六―一五七頁。

『女学世界』は、良妻賢母の育成を目的に博文館から一九〇一年に発刊された婦人雑誌であり、この八重

の談話は、「江湖」（雑報）欄に掲載された。前書には『大阪毎日新聞』の記者（著者名は明記されていない）の手になる談話記事とあるが、『女学世界』には、他に八重関連の記事を掲載されている例もないことから、恐らくこの雑誌の記者と八重の間には関係がなかったと思われる。

一八九〇年四月に日本赤十字社の社員となった八重は、日清戦争時には広島で、日露戦争時には大阪で、篤志看護婦を統率して救護活動にあたった¹⁵。日清戦争時、『女学雑誌』には「日本の黄鶯嬢―広島に於ける看護婦―」という従軍看護婦の活動に取材した記事が掲載されたが、この記事には女子教育で看護技術が教えられることが望ましいと語る八重の談話が紹介されている¹⁶。

一方、ここに復刻した「新島夫人の看護談」は、日露戦争時の八重の従軍看護婦体験が語られたものである。当時、六十歳を過ぎていた彼女は、怪我人や病人を励ますなど精神面でのケアを担っていた様子が見える。戦争の大義を認める一方で、戦禍のもたらす悲惨から目をそむけていない八重の姿が印象的である。

④ 「同志社女学校創立事情」『同志社女学校校期報』第二四号、一九〇七年八月、二一―二三頁。

同志社女学校で創立三十周年祝会が一九〇七年五月二十八日に行われた時に、八重の語った談話の記録である。「新島未亡人は女学校設立当時の事情を其の記憶の中より語られたが、一座今昔の感に堪へなかつた」と記録者は記している。

この談話は、同志社女学校の初期の状況を語る貴重な資料の一つとして、『同志社創立九十周年記念誌』（同志社同窓会、一九六五年）などで既に紹介がされているが、¹⁷完全な形で復刻は行われていなかった。本稿では、全文の復刻を行っている。

⑤「家庭の人としての新島襄先生の平生」『婦人世界』第六卷、第一号、一九二一年一月、四七―五二頁。

掲載誌『婦人世界』は、一九〇六年一月に刊行が開始された月刊の婦人向け総合雑誌である。婦人雑誌研究者の中野邦氏によると、「日露戦争後の日本の国家にふさわしい理想の婦人」をつくることを目指した同誌は、出版間もなくの時期、婦人雑誌の代表的な位置につき、八重のこの談話が掲載された一九一一年当時には、婦人雑誌中、最高位の売上を誇っていた。学校教育に関しても盛んに記事を掲載していた同誌は、それまでの文学的教養的色彩の濃かった旧来の婦人雑誌の型を破り、その後の婦人雑誌に大きな影響を与えたといわれる。¹⁸⁾

この『婦人世界』は、新島に対する談話を八重にうかがう前に、会津戊辰戦争に関する彼女の回顧談（「男装して会津城に入りたる当時の苦心」『婦人世界』第四卷、第十三号、一九〇九年十一月）を掲載していた。改めて、同誌の編集部が新島に関する回想を八重に求めたのは、「殊に私どもの最も記憶すべきことは、先生は日本で初めて私立の大学を創立せられた方」と前書にあるように、教育者としての新島に関心を抱いたがためであろう。

なお、冒頭の「待ちぼけしたことがない」の一編は、八重子夫人談「新島先生の日常」として、『新島研究』第九号（一九五六年）に転載されている。

⑥「ステュワートニコルズの死を悼みて」『同志社時報』第二三六号、一九二五年十二月一日、四―五頁。

この八重の談話は、『同志社時報』のステュアート・バートン・ニコルズ追悼号に掲載された。ニコルズ（一九〇二—一九二五）は、一九二二年に、アーモスト大学から同志社大学に第一回目の交流学生として来日した人物で、同志社に二年間在籍したが、帰米してまもなく若くして亡くなった。談話は、同志社大学英語協会（E・S・S）代表の美浦三郎の聞き取りによるものであり、八重晩年の心境がうかがうことができるものである。八重は、一九二五年十一月五日に同志社で行われたニコルズ追悼会にも参加し、追悼の辞を述べている。

なお、この談話は、『追悼集Ⅲ 同志社人物誌 大正五年—大正十五年』（同志社社史資料室、一九八九年）に復刻されている。

⑦「生一本なラーネットさん」『人道』第二七六号、一九二八年十月十五日、七頁。

一八七五年に来日したアメリカン・ボードの宣教師ラーネット（Dwight Whiney Learned）は、一九二八年九月、長年に及んだ同志社の教職を終えて、アメリカに帰国した。留岡幸助の主宰する社会事業雑誌『人道』は、「ラーネット博士送別記念号」を設けているが、この号に八重はラーネットに関する談話を寄せている。この号には、留岡幸助をはじめ、徳富猪一郎、湯浅吉郎、安部磯雄らも記事を寄せていた。

なお、『人道』は、八重の亡くなった時、『東京日日新聞』（『大阪毎日新聞』）に掲載された徳富蘇峰の所感を転載している。¹⁹⁾

⑧「新島先生逸話」『新島研究』第一五号、一九五七年十一月、二六—二九頁。第一七号、一九五八年十二

月、二六―二七頁。第一八号、一九五九年四月、二四―二五頁。第一九号、一九五九年七月、二九―三〇頁。

この談話は、既に本誌で過去に発表されたものであり、研究者によく知られているものであるが、八重の新島に関する回想として資料的価値が高いことに鑑みて、改めて復刻をしたものである。「其二」の冒頭の断り書き（無署名であるが、当時の『新島研究』編集長森中章光の記述と思われる）には、一九一七年十二月十一日、十二日の両日にわたって、八重から新島に関する回想の聞き取りがされたものとあり、原稿の筆跡から見えて筆記した者は女性らしいとの推測がなされている。ただ、いかなる事情からか、その聞き取りが行われてから約四十年後まで、この談話の活字化は行われなかった模様である。現在、この原稿の所在は不明のため、過去の『新島研究』誌における復刻が正確に行われたものかどうかを確認することはできない。

注

(1) 永沢嘉巳男編『新島八重子回想録』同志社大学出版部、一九七三年。「新島未亡人回想録」は、『同志社新聞』第二三―二七、二九―三〇号（一九二八年六月一日―九月十五日、十月十五日―十一月一日）に連載され、単行本化の際、談話を取材した記者（永沢嘉巳男）自身の手で修正が行われた。この単行本は、大空社の伝記叢書（第二三八巻、一九九六年）で復刊されている。また、『追悼集Ⅳ 同志社人物誌 昭和二年―昭和六年』（同志社社史資料室、一九九一年、二九七―三二二頁）は、新聞連載時の初出を復刻している。

(2) 本資料紹介では、復刻対象を雑誌記事に限定しているが、八重の談話は、下記の単行本の著作にも収められている。平石弁蔵『会津戊辰戦争―白虎隊娘子軍高齢者之健闘』改訂増補第四版、丸八商店出版部、一九二八年、四八三―四九二頁。「強い清い信仰と同志社の恩人」三浦豊二編『大沢善助翁』大沢善助翁功績記念会、一九二九年、二〇―二三頁（第四編）。

- (3) 「ステュワート・ニコルズの死を悼みて」『追悼集Ⅲ 同志社人物誌 大正五年―大正十五年』同志社史資料室、一九一九年、二七八―二八〇頁（初出は、『同志社時報』第二三六号、一九二五年十二月一日、四―五頁）。この談話は、本稿にも再録している。また、「新島未亡人回想録」に関しては、注(1)を参照。
- (4) 『追悼集Ⅱ 同志社人物誌 明治四十一年―大正四年』（同志社史資料室、一九八八年）と『追悼集Ⅳ 同志社人物誌 昭和二年―昭和六年』（同志社史資料室、一九九一年）に、あわせて数編の八重の新島記念会における発言が収められている。
- (5) 「亡愛夫襄発病ノ覚」『同志社談叢』第一〇号、一九九〇年、七九―八四頁。この八重の覚書は、根岸橘三郎『新島襄』（警醒社、一九二三年）の附録に収録されたものが初出であろうか。なお、この覚書は、「逝きし夫を偲びて」（『新島研究』第八号、一九五六年）という表題でも過去に復刻（抄録）されている。
- (6) 吉海直人「新島八重子刀自懐古談」の紹介（全文翻刻）解題『同志社談叢』第二〇号、二〇〇〇年。
- (7) 同「新島八重の「懐古談」補遺」『総合文化研究所紀要』（同志社女子大学総合文化研究所）、第二四号、二〇〇七年、二一四―二二〇頁。
- (8) 石丸久編「年譜 湯谷紫苑」『明治文学全集』第四四卷（女学雑誌・文学界集）、筑摩書房、一九七三年、四三七―四三八頁。原恵「湯谷磋一郎」『日本キリスト教歴史大事典』教文館、一九八八年、一四五―一四八頁。『同志社文学雑誌』（第五一―五二号、一九九二年二月二十日）には、新島二周忌に詠じられた湯谷の歌が掲載されている。『追悼集Ⅰ 同志社人物誌 明治十年代―明治四十年』同志社史資料室、一九八八年、八九頁。
- (9) 本論では、一般に通用している「清水紫琴」の名称を用いているが、この名称自体が署名上で存在しないことに関しては、高田知波氏の指摘がある。高田知波「女権・婚姻・姓表示」『新日本古典文学大系 明治編』第二三卷（女性作家集）、岩波書店、二〇〇二年、一九八頁。
- (10) 山口玲子「泣いて愛する姉妹に告ぐ―古在紫琴の生涯」草土文化、一九七七年、一六―二五頁。
- (11) 「(生野) ふみ子」の筆名が、一般に「編集会議をへた社中合意のテーマの場合」に用いられていたことから考えて、紫琴による八重の新島回想の取材は、彼女個人の関心から行われたのではなく、雑誌記者としての職務として行われた

ことが理解できる。同上、一一六頁。

- (12) 矯風会有志「婦人の議會傍聴禁止に対する陳情書」『日本婦人問題資料集成』第二卷、ドメス出版、一九七七年、一二五—一二七頁。

- (13) 本井康博「解説」(永澤嘉巳男編「新島八重子回想録」(同志社出版部、一九七三年)の復刻版(大空社「伝記叢書」第二三八巻、一九九六年)に収録)。同「近代新潟におけるキリスト教教育—新潟女学校と北越学園」思文閣出版、二〇〇七年、二八九頁。「女報 新嶋先生未亡人」『女学雑誌』第二四四号、一八九〇年十二月二十日、五二七—五二八頁。春田国男「日本国会事始」(日本評論社、一九八七年、四三頁)は、八重の議會傍聴(紹介者は、熊本県選出の民権派議員山田武甫^{たけふ})を伝える「読売新聞」の記事(一八九〇年十二月十八日)を掲載している。

- (14) 高野静子「蘇峰とその時代—よせられた書簡から」中央公論社、一九八八年、一九四—一九五頁。蘇峰は、熊本で山田武甫の選挙応援をしていた関係上、新議員の彼にこの件を頼むことが可能だったのだろう。

- (15) 本井康博「京都のキリスト教—同志社教会の一九世紀」日本キリスト教団同志社教会、一九九八年、二九七—二九九頁。同「ハンサムに生きる—新島襄を語る(七)」思文閣出版、二〇一〇年、一五八—一六〇頁。亀井美智子「近代日本看護史—血宗教と看護」ドメス出版、一九八五年、二二—二三頁。

- (16) 栗谷七郎「日本の黄鶯嬢—広島に於ける看護婦」『女学雑誌』第四〇七号、一九九五年二月二十五日、二五頁。「他日人の妻母たらんとする女学生諸子は何卒看護の片端なりと心得居られたし、嘗て京都市の篤志看護婦に於て月一回宛学習せし事ありしに暫くして会員方の話を聞くに皆家族の救護に大功ありしを感謝し居られたり、然れば一週間何度しても一年以上も修められなば可也に役に立つ丈を学ばるべし、然して其効は実に一家の幸福児孫の健全を期すべし。願わくは全国の女学校が進んで斯学を科程中に入れられん事を」と八重は語っている。

- (17) この「同志社創立九十周年記念誌」の紹介文は、『同志社女子大学二二五年』(同志社女子大学、二〇〇〇年)に再録されている。

- (18) 中島邦「『婦人世界』について」『マイクロフィルム版『婦人世界』別冊 解説・執筆者名索引』臨川書店、一九九六年、三一八頁。

(19) 「新島八重子刀自」「入道」第三二一号、一九三三年七月、一四頁。蘇峰の追悼文「時代の波―新島老夫人の永眠」は、『追悼集V 同志社人物誌 昭和七年―昭和九年』（同志社社史資料室、一九九一年、九八―一〇〇頁）に収録されている。

(20) 本井康博氏の御教示による。

〔復刻〕

① 新島襄先生未亡人を訪ふ

郁山人

訪問亦一種の流行熱なり

とは言はゞ言へ、西施せいしに模する東施とうしと言はゞ言へ、一朝ちやう東海波起とうかいなみこり波高く一閃光たいせい！大星流れ天下の志士をして不覚の血涙けつるいに咽むせばしめ、世間有為の青年をして蛟龍こうりゆうの雲氣うんきを失ひたるが如く感触せしめたる日本帝國の大改革者、大精神家、大教育者たる新島襄先生の永眠し玉ひしより月を閲くわんすること既に六たび、朝あした洛東らくとう若王子山頭じさんとう松陰しょういん緑深りくみどりき処ところに杖つえを曳ひき、城北層樓じよほくきうろう高く天を衝つく辺へんに誦読じよとくの声を聴きき、親しく先生の活ける記念碑を知るもののためには全く不必要のことなりと雖いへども、身遠く山河の外に在りて、徒いたずらに旧都きゆうとうの天を望み、空むかしく白雲はくうんの去來を觀て轉うたた断腸の思ひに沈む人士淑女の為に豈あに多少の裨益ひえきなしとせんや、是れ即ち

新島令夫人を訪問する所以なり

時正まはだに六月二十八日午前八時、同志社校友なる二知己ちちき亦共ともに俱ともにす。先門ますを入れば梅子ばいし既に枝を辞じして琵琶ひば正まはだに黄熟こうじやくす。一少童竹竿しょうちゆくかんを以て之を擬ぎす、無邪氣真まごしに愛ますべし。人は云ふ、先生大業正まはだに央なかにして世を辞じせりと。豈其れ然しからんか天之てん之を与よへ天之てん之を奪うう、天命復また爰なんぞ疑いはん。然しかりと雖いえしも、今熟々果実つらつらの黄熟こうじやくを仰あやぎ、先生遺愛いあいの緑陰りよくを踏ふんで、豈幾多いの感あなきを得えんや。相拶あいさつ終おつて先づ、

頃日起居如何

と問ふ。令夫人曰く、永く神経を疲労し、医命いめいにより出来る丈世事だけせじを棄すつる様にし、閑散かんさんならんことを期すす、愛読あいとくの書をすら今や手に近づちかづくること能えはず、新聞の如ごときも見ること時余じよに到いたるを得えざる位なり。談漸だんぜんく、

京都婦人の運動

に及ぶ。令夫人曰く曩さきに（一昨年）札幌さっぽろに在りしとき京都婦人共きょうとふじん励いかいの起おこるを聞き、以おもえらく、婦人禁酒会ふじんきんしゆかいの既いに在ある有あり、外出がいしゆつに不便ふびんなる日本婦人にっぽんふじんのために会多かいきは却かへて益えきを見ること少すくなからんと。近來きんらいモリス夫人モリスふじんのために集あまりしときも来会らいかいする婦人ふじん僅わずかかに五十名ごじゅうまいにすぎず夫人ふじんのために御氣おんきの毒どくに思おもひし位くらいなり。

又曰く、貴婦人某きふじん々が訪とふこと敷しばばなり。然しかども談話だんわの区域くいきの狹隘きやくがいなるは実に驚おどろし、突然とつぜん某それの鬚形すけがた、某それの服装ふくそう、某それの模様もやう、目下東京めげとうきやうに流行りやうすと之れ奈何いかんせば可かならん杯問はいもんひ掛かられて甚いただ迷惑めいわくすること度々たびたびなり、又機またを見て所思しよしを陳のべんとするも彼等かれらは巧たくまに之を避よくるが故ゆゑに致方いたしかたなし実に困こつたことなり。又曰く、新島にいは都踊みやどにも逆さかつてもだめ同行どうぎやうすることはなく酒を出しても飲のみもしない杯煙酒はいえんしゆを帯おびたる呼吸こそくを吹き掛かけられて申まさるゝには困こること一方いっぽうならずと、談頭だんとう。

卒業の女学生

に及ぶ。令夫人亦同感を表して曰く、有為の評判ある女学生も一度嫁する時は旧慣に絆されて如何なる処に在りて、如何なる事業を営み居るや明かに分らざることは実に残念なり——然ども僅もよきホームを造り居れば先づ十分なりと云はざるを得ず、つまり、天保の人が昇天せずば思ふ通りには行くまじと微笑しつ、申されたり。問ふ、

同志社女学校

のために如何になし居玉ふや。令夫人曰く、前述の如く病氣のために余り度々行くこともなせず、亦何とて別に働くこと云ふ様なこともなしと——然ども、余は同校教授某姉にき、しことあり、令夫人来て、ドーズ辛棒して務て呉れと申さること度々にて為めに励まされて職を奉ずるの心を継続し居るものをほしこと、然れば令夫人の女学校に対する知る可きなり。其他、某女史のこと等も彼是承りし処もありしか、此際にも来客の出入少からず、昨二十七日は同志社卒業式にて自ら待客の勞を操り、昨夜も祝会のために勞し一時半許よりは安眠し玉はさる由を承りたれば、夫人将来に如何に計企し玉ふ処ありや等大切なる問題を尋ねることを得ず、他日再訪を期して友人と共に只管幽精の地に避暑し玉ふ様勧め参せて辞したり。

夫人は目下多病なり

然ども子供等の続々卒業して世に出で又洋行する等を見て楽み居らる、こと色に現はる、或は令夫人の高く処するが如く見ゆると疑ふものありと聞く、余以為へらく是即妄言の甚しきものなり、令夫人は元と勇ましき女丈夫なり、今やキリストの愛に包まれて温乎たる処真に人をして親ましむべし、客に接するに

微笑は常に唇頭に躍りて止まず、殊に会津天賦の舌回りは客をして一種の愛嬌電気を感じせしむ、豈に勝先生嘗て亡先生に贈る処所謂処人靄然たるものなからんや。

② 新島襄先生未亡人の談話

社員ふみ子頃日京都に到り好き便りとして新島夫人を訪ひぬ。此の音づれは他に要談ありたる故にて紙上の読者に告げ参らす可き為の談話をなしたるには非れども偶然承り得たる事にて故新島先生の幼児の状況を窺ふに足る談話一つ二つありたれば今猶新島先生を懐ふて忘る、能はざる読者諸君の為に同先生を忍ぶの材料にもと、左に掲げぬ。

新島先生の疵痕 新島先生の顔面より頭部にかけて、大なる疵痕あるには、誰しも注目することとなるが、或人は此疵に就て、説を為して曰く、個はこれ先生が、札幌より、桑港へ、到らる、間に、船中に於て、船長より得られたる疵痕なりと。然るに今聞く所に依れば、全く左る事に非ず、此疵は、先生が、八歳計りの、頃にや在けむ、自邸の裏にある、塵芥溜の、傍にて遊戯し、誤つて逆まに、其塵芥溜に陥り、中に在りし杭にて突裂かれたる疵なりとぞ、其疵の非常に大なりしは、一旦縫ひたる疵口の中に、砂石等の残り居り、全癒せざりし為め、更に又、其下部を切りて、治療せられしが為なりと、新島未亡人は語られき。

新島先生の結髪

新島先生十一歳の時、暑中に道場より、帰りがけ結髪床に到り、結髪せしめんとせられ

しに、暑中といひ、他を出歩行きて、炎天に曝されたる事なれば、元結を切ると同時に、其の臭気紛々として、髪結ひの鼻を衝きしと見へ、髪結ひは、思はず、アナ臭しと叫びたるに、新島先生之れを聞き、俄に立上り曰はる、やう、止めよ髪は結ふに及ばずとて、髻を乱したるまゝ、帰宅せられ、物陰に入りて手づから髻を束ね、兎角して、結び終りたり、始めての事といひ、小児の手細工なれば、其不かつこういふ計なし、家内の人々之れを見て且笑ひ且論し、頻りに、他をして結び更へしめん事を勧む、然れ共先生聴かず、奮然として曰く私の頭は甚だ臭き由なれば、臭き頭を、人に嗅すは、氣の毒故、自ら之を結ぶにしかず、とはいひしもの、先生は其美左迄に不かつこうなりとは思はれざりしなり、然るに暫くして不図浄水に行かんとて白壁の傍らを通り、日影に映じたる、自分の形容を見れば、成程人々の笑ふも尤もなり、前髪は甚敷前面に突出て、結たる元結のさきは三分ほども、残り、しかも堅結びになりたる、髻のイチは、しだらなく、曲りくねりて、何か別に物を、載たるが如き状したる、自分ながらも、をかしき形にてありしよと、さとりしもの、一旦人に結ばせじと、断言したる廉もあり、遂に其儘になし置き、夫より後は、斬髪にならる、迄、一切人には、髪に手を触れしめられざりしとなむ。個はこれ新島先生が、同夫人に、生前笑ひながら、語り玉ひたる談話なりとぞ。

新島先生幼児の約束 新島先生は、幼児より、約束を、重んずる美風あり、是れも先生が、十一歳の頃の事とか、剣術の師匠許にて、試合ありけるに、先生は何とかして、同輩に勝ちたしと思ひ、摩利支天に立願せられ、果して此の試合に勝たば、御百度を、あぐべしと、誓はれたるに、首尾よく勝ちおふせたり、爰に於て先生は、直ちに紙捻百本を拵らへ、之れを持ちて、摩利支天の、社へ馳せ行き、約束の如く、百度廻られし由なるが、其の後、屢人に語りていはる、やう、摩利支天との、約束には、実に懲り果てたり、紙捻百

本拵らへるは造作なけれど、百度廻りは、随分、めんどうなりし、爾後斯の如き約束はなすまじと、果ては笑ひ話しの、一つになりしとぞ。

新島先生幼児の執拗　先生が七歳の時とか、始めて漢学の、先生許到りて、経書の句読を学ばれたるに、先生の殊の外物覚悪しとて、太く頭を叩かれたる為、憤に堪へず、帰りて床の間に、書物を擱きたる儘、其前に平伏して、太く打泣かれたり、先生の父君之れを見て七三、何を泣き居る乎、と尋ねられしに、先生告ぐるに、師が自分の頭を、打ちたる事由を以てす、父君いはる、には、其を何の憤る事がある、却て先生の許へ、御礼に行かねばならぬなり、先生は、汝が覚へても覚へないでもよいといふ、思召ならば、汝の頭を、打ち賜はざる可きも、汝をして、記憶、能き人とならしめんと、欲し給へばこそ、頭まで打ち給ひしなり、今より予が伴ふて、御礼に行く程にとて再三促されけれ共、頭を打たれて、礼に行くものやあるとて、如何に強ゆるも、遂に再び、其先生の許へは行き給はざりしとなむ。

③ 新島夫人の看護談

過日来大阪予備病院に於て最も熱心に傷病兵の看護に従事し居らる、故新島先生の夫人が大阪毎日新聞記者に話されたる談話の要領を左に紹介すべし、

私はもう年寄（六十一歳になられる）でございますので何か国の為に盡したいと思つて当地の病院に来て

は居りますが何もお役に立ちませんで誠に愧づかしい次第、只もう一片の赤心を以て遣つて居るばかりです、会員の方々は皆熱心なお方ばかりで傷病者を看護して居るのは年端も行かぬお嬢さん達が多くて、皆京都の大学で実習を積まれて居られるので、私は只其監督を致して居る計でございます、皆さんは朝は八時から午後の四時まで傷病者の看護、綑帯交換、手術の手伝ひをなさいますので、手がなくて字の書けぬような人には代筆したり、随分甚い仕事を喜んで遣つて居れます、私はもう年寄で何も出来ませんので傷病者を慰める事をして居りますが、或は手の無い人、足の無い人、脳を撃たれて精神に異常を来した人、其他種々の人を見ると国家の為とは申しながらまことにお気の毒でなりません、斯ういふお方の親となり妻となり子となつた人々の心は何んなであらうかと、身を切られるやうで決して他人事とは思はれません、あなた方の様な名誉な事はありませんと云つて慰めては居りますけれど、此人々の事をば察して見ますると知らず／＼涙が催されまして室外へ出て眼を拭ふ事が度々あるのでございます。

京都の篤志看護婦会は今では千六名の会員があり非常な勢ひでございます、会長は御承知の通り村雲尼公に御願申して、副会頭は大森知事の夫人でございます、何れも御熱心の御方許りでございますから、今日の様々盛大を見る事が出来ました、私などは幹事の名を附けられて居りますけれども無教育な者で何んのお役にも立ちません、お愧かしい次第でございます、今此方で働いて居られるお方は小島ふく子、平岡くま子、河野はな子、清水つる子、佐倉はま子、小笹れん子、田中あい子、三宅たつ子と副監督の九人で皆な若いお方ばかりでございますが、六十日間勤務して又他のお方と交代せられるのです、此処では皆さんと一所に一家族になつて居りますが、先日も花を観に行かぬかと勧めて呉れる人がありましたが、傷病者の事を思ふと少しもそんな気は起りません、外へ出るならば只教会へ行つて此人等の為に慰安を祈るより外の考はありません云々。

④ 同志社女学校創立事情

三十年祝会席上に於ける新島未亡人の談話

同志社女学校の始の事はモ一三十年の昔の事でありますから、私も大抵忘れてしまひました。最初はコンナ女学校が出来るといふ様な考は少しもありませんでした。明治九年の頃でありました、私の宅が今の第一高等女学校の南東の角にありました時、某宣教師と談話の末、女学校を始めては如何であるうという事になり、取敢へず私の宅で開きました。其時の生徒が三人でありまして、妙な事には其中に九歳になる男子もありました。其時某宣教師が歌を教える、私が第一リーダーを教えるといふ様な始末で、之が今の同志社女学校の基でありました。

所が生徒の二人は姉妹でありましたが姉は病気で死ぬる、妹は勉強が嫌やといふて去り、殆ど学校が消滅の姿となりました。そういふ内に誰か此事を米国の方へ言ふて遣つたものがありましたと見え、米国から直ぐ二人の婦人宣教師が来られ、其から御苑内のデビスさんの宅（元柳原邸）で女学校を開く事になりました。今此処に御出でになる辻さんなどは其時の生徒の一人でありました。（編者曰ふ、辻夫人に聴けば夫人は当時尚幼少にして只だ姉君に従ひて学校に来られし迄にて未だ生徒にはあらざりし由）其から段々米国の賛成者から金を送つて来て、間もなく今の女学校の校舎が出来、其れに引移る様になりました。当時は生徒の数も十二三位でありましたが、今は此様に盛になりました、之は神の恵としか思へません。本当に或時などはモ一女学校も滅びるかと思ふたこともありましたが、「神は煙れる麻を消し玉はず」で、斯ういふ時にも女学校を見捨て玉はなかつたのであります。大きな池に小石を投ぐれば、始は小さな波紋でも、後には段々と

大きくなつて来ますが、同志社女学校も三十年たつて波紋が余程大きくなつて来ました、五十年、百年となつたらどんなに大きくなるであらうかと思ひます。

⑤ 家庭の人としての新島襄先生の平生

故新島襄氏夫人 新島八重子

日本宗教界の先覚者として、教育界の大恩人としての新島先生の名は、何人も知らぬものはありません。先生は先生の熱烈火の如き信仰と、高潔珠の如き人格と、信ずるところを執つて一歩も退かぬ勇氣とは、一代の師表として、何人も渴仰するところですが、殊に私どもの最も記憶すべきことは、先生は日本で初めて私立の大学を創立せられた方であることです。先生逝ないてここに二十一年、もう二昔ふたむかしになりましたが、先生の創立された京都の同志社は、今なほ盛んに育英のために力を盡して、数百の学生を教育してゐます。しかも、その卒業生の多くは、或は政治家として、或は教育家として、或は宗教家として、或は宗教家として、或は文学者として、第一流に数へらるる人が多いのによつてみれば、先生亡しといへども、先生の靈は永くこれらの人のうちに生きてゐると申して差支ありませんまい。

先生は、天保十四年一月のお生まれで、明治二十三年にお亡くなりになりました。夫人八重子の君は、当時京都府の顧問をしてをられた会津の豪傑山本覚馬氏の令妹で、会津籠城の際は娘子軍の花であつたさうです。明治九年一月三日に、京都で結婚せられました。夫人は、今なほ京都の旧邸のうちに起臥して、折りふしは昔の思ひ出に、老の袖を絞られることもあるとのこと。次は、記者が夫人を訪うて

伺つた追懷談の一節です。

◎待ちぼけしたことはない

襄は、明治八年に京都へまゐりまして、十一年にこの家を新築いたしました。若い時から脳が悪くて、よく眠られないと申して、朝は誠に早く起きます。六時半には朝飯をすまして、七時前には宅を出ますのが例でございました。同志社は、宅から八町ほどこか離れてをりませんので、毎朝歩いて通ひました。お昼には必ず帰つて、一緒に食事をいたすのでございますが、時によると、学校の食堂で生徒と一緒に食事をするのもございました。

昼飯をすませますと、午後また学校へまゐりまして、四時頃に帰宅いたします。勉強は夜いたしました。十時には必ず眠ることに極めてをりました。

時間はなかなかやかましい方で、お昼は必ず十二時半までに帰るやうにしてをりましたが、時によつて、学校の食堂で食事をしましたり、客と一緒に食事をすませます時は、必ず前に小使こづかいを使によこして、「今日はこちらで昼食をするから、お前は先きへ済ませるがよい。」と知らせてよこしますので、私は、一度も冗むだに待ちぼけしたことはありませんでした。

◎お蕎麦を十二食べた秘密

襄の一番好きなのは、お蕎麦でございました。いつか国民新聞社長の徳富蘇峰さんと、横井時雄さんと、湯浅次郎「治郎」さんと御一緒に、中仙道へ旅行して、信州の寢覚の里へまゐりました時、皆さんで大層お蕎麦を召上つたさうですが、これはお互に秘密を守つて、決して口外してはならぬといふお約束であつたさ

◎煙管きせるを折つて海に投ず

ところが、船がアメリカへ着きますと、船員は皆上陸してしまひまして、裏は船番をさせられました。暫らくすると、仲間のものが帰つて来て、お前も上陸してみろといはれましたので、上陸してみましたさうです。それから隠袋カゲツトを探してみると、お金が十銭あつたので、五銭で煙草を買ひ、あとの五銭で煙管きせるを買ひました。それからまた船へ帰つて、煙草を小刀こがたなで刻んでは、大きな雁首がんくびへ詰めてスパスパと二三服吸つてみると、実においしかつたさうです。

煙草をふかしながら、自分はこれからアメリカへ行つて、どうして勉強しようかと考へると、ふと先日勉強の妨げになると思つて禁煙したことを思ひ出し、一旦禁煙しながら、また喫みはじめるとは、我れながら愛想がつきる。心に誓つたことを自分で破つてしまふやうでは、とても成功は覚束おぼつかないと、非常に感じて、今買ったばかりの煙管を二つにポッキと折り、煙草と一緒に海の中へ投げ込んでしまつたさうです。それから後は、まったく煙草を喫まなくなりました。

◎二階から犬を見て喜ぶ

裏は、学校へ行く時、いつも郵便屋の持つやうな大きな袋の中へ本を一杯つめて肩へかけてまゐりますが、帰つてまゐりますと、玄関から、

「今帰つたよ。」

と声をかけますから、私が出てみますと、袋を書斎の前へ投げ出したまま、裏へまはつて畠を作つてゐることがよくございました。裏は、犬が大好きで、いつも二三匹は飼つてをりました。病氣になりましてからは、いつも二階の窓から庭を見下ろしては、犬の遊び戯れるのを見て喜んでをりました。

◎女浄瑠璃を聞いて飛出す

音楽や演劇などは一向好みません方で、何でも十七ばかりの時、東京の両国橋のそばに、女浄瑠璃といふ看板が出てをりましたのを、通りすがりにみて、どんなことをするものかといふ好奇心から、木戸銭を十六文とか拂つて入つてみたさうでございます。やがて紺の着物を着た白い顔の女が高座にあらはれて、ウーと唸り出したさうですが、唸ると女の咽喉が膨れるので、思はずプツと吹き出して、大小を抱へて表へ飛び出したことがあると、後に笑つて話したことがございます。

その他、お金を出して興行ものを見たのは、米国にをりました時、日本の力持をたつた一度みただけだといふことでございます。

そのかはり、書生さん方と、足相撲をしたり、腕相撲をしたりすることは好きでよくいたしました。それに、昔大分武藝をした人ですから、なかなか強かつたやうでございます。

◎まあお茶でも一つ召上れ

随分気の短い人で、少し気に入らないことがあると、ぢき顛顛こめかみに青い筋があらはれます。すると、私が、「オヤ、今日は雷でも鳴りさうですね、大分雲ゆきが悪い。」と申すと、笑つてしまひます。そして、平なことがあるといつも私に向かつて申しますので、

「そんなに不平をいふより、お茶でも召上つた方がいいでせう。」

といふと、

「お前は私がこれほど怒つてゐるのに、笑つてしまふといふことがあるか。」と申しますから、

「それでも、あなたが怒つていらつしやるのに、私までが御相伴して怒つては仕方がないではありませんか。」

と申しますと、ウム、さうだと申して、果は笑つてしまふのが常でございました。

◎陸奥伯爵夫人と令嬢を褒める

襄は、婦人に関する話はあまりいたしませんでしたから、婦人についてどんな考を持つてをりましたかはよく存じませんが、いつも口癖のやうに、日本の婦人のやうに因循ではいけないが、といつて米国風のお転婆も好かぬ、英国の婦人が一番好きだと常に申してをりました。アメリカでは、客でもありますと、良人は妻君に椅子を譲りますが、英国ではその反対ださうで、どうしても英国の婦人がいいと申してをりました。

その頃、婦人の演説をすることが大分流行はやりましたが、襄は、婦人が演説をするなどといふことは怪けしからん、女はどこまでも女らしくなければならぬと申してをりました。そして、今の婦人は、もう少し勇気がなければならぬと申してをりました。

故もとの陸奥宗光伯爵が外務大臣「駐米公使」の時、襄が御招待を受けて、伯爵の御家族と一緒に御飯をいただいたことがございますが、帰つてから、伯爵の奥様やお嬢様を非常に褒めて、ああいふ風に御交際上手ならば、外国へ行つても少しも恥かしいことはないと申してをりました。

いつか熊本の女学校から頼まれて書いた額に、

『美德を以て飾りとせよ。』「美德、以て飾りと為す」

と書いて送りましたが、これが襄の理想であつたらしく思はれます。

⑥ ステュワートニコルズの死を悼みて

新島八重子

只今までニコルズさんの亡くなった事は一寸も存じませんでしたがお若いのに惜しかったと先づ初めに感じました。初めて彼の方にお目にかゝつたのは昨年の二月でワシントンの誕生日にバトレト様のお宅に夕飯に呼ばれた時でした。大変体の高い頑丈な体格な方だと感じましたのに：

実は六月の二十二日に義理ではありますが大変可愛がつてゐました孫が二十三と云ふ花の盛りに前途有望な身でしかも東京の帝国大学を優等で卒業する筈でしたが僅か二週間の患らひで脊髄脳膜炎で天国にまた私より先きに参つてしまいました。そんな意味に於て肉親の若い者を失ひました汀みぎわにあつて悲しんでゐますのでニコルズさんの亡くなった事を伺いて実にその母上なる人の事を考へますと御同情に絶えない次第です。遠くありかから私達の同志社にたつた一人の息子さんを離して送つて下すつたその母者人がその後で遂に不治の病の為に亡くなつた事を思ふ時はどんなにか悲しむでゐられるでせふとほんとにお氣の毒に存じます。その私の亡くなりました孫にも二つ違ひの妹がありました。よく世の中で兄弟げんかなど申しますがそんな事の少しもないほんとに仲の良い兄妹でした。その子も生まれるときから私は襄のあとを継がせ様と思ひまして名前も襄治とつけ眼にも入れてもいたくない程可愛がつてやりました。五つ位の幼稚園に通つてる時分から「おばあさん、僕は早く小学校に入つて中学校から同志社に入つておぢいちゃんに敗けない様に勉強してそれからおぢいちゃんの行つてらしたアメリカの大学校に行つて偉らくなります。その時分にはおばあさんももつともつとほんとおばあさんになるでせうから僕がアメリカかイギリスに行つて立派なお家を作

つて上げて毎日お馬車に乗せてきれいな公園や野原に散歩に連れていって上げませう」と幼子の心にもけなげに云つて呉れてましたのに突然のわづかのわづらひで天国に先に旅立つてしまひました。ニコルズさんのたつたお一人切りのそのお妹さんもお兄さんを失くしてどんなに悲しまれた事でせう。

しかし裏に聞いてをりましたがこう云ふお話があります。ム「ハ」ーデーさんが一遍火事の為にお家を全部焼かれてしまはれた時やお友達がお宅を失はれてお気の毒ですとお悔みを云はれた時にム「ハ」ーデーさんは直ちに「否え家は全部失いましたが私の信仰だけは決して失つてませんから御安心なさい」と云はれたさうですが私などは親しき人達は皆先きに召されて天国に昇つてしまつて今度は自分の番かと只天命を待つてゐるばかりです。早く天国に昇らせて頂いて先きに行かれた人達と会ふ事を樂しみとしてゐますからこんな大きな家に只一人住んでゐましても決して淋しいなどと思つた事はありませぬ。さうした信仰を持つて残る老先きの年を全ふする事の出来るのを只々神様のみ恵みと感謝してゐます。

丁度明日で満八十才になります。二十人位のお茶のお友達をお招きして静かなお茶の席に神様にすべての事感謝しつゝ、誕生日を味ひ度いと思つてます。丁度旧暦で明治天皇様と同じ日に誕生日を持つてゐますのでいつも有難く存じてゐます。

何卒ニコルズさんの御母堂にもそんな意味に於て私が女性の立場から又母性の立場からほんとに此度びのニコルズさんの死に対して衷心よりの哀悼の意を表してゐるとお伝へ下さい。

「附記」右は十一月二日夕ニコルズさんの死の報らせを齎らしてバトレト夫人の御注意に依り新島未亡人をお尋ね致して伺つたお言葉の一鎖りです。

静かな夕霞に烟る邸内に十六夜の月が寂しく私達の悲しみを知るが如く照つてゐました。

大正十四年十一月五日

美浦生

⑦ 生一本なラーネットさん

新島八重子（談話）

あの生一本な真面目なラーネットさんにも、なか々々面白い滑稽な話題が少なくありません、尤も先生自身は何処までも真面目で貫いてゐるのですけれども傍から見ても面白いと云ふに過ぎませぬ。先生が日本へ来られたのは明治初年のことですから何処へ行つてもまだ々々西洋人の珍らしい、恐らく話には聞いてゐても本当の西洋人を見たことのない人ばかりだったでせう。其頃ラーネットさんが何処か田舎へ出掛けて行きますと、土地の人々は「あら天狗が来たッ！」と云つてみんな驚いて逃げ出したといふ事実もあります。其時先生は、「わたし、天狗ありません々々々々」と大きな声で説明した相ですが何分先生一流の日本語だったから、実に気の毒なやら、面白いやらだったと云ふ事です。

ラーネットさんが廉直であることは、故人新島も非常に敬服してゐました、上原方立といふ大変な信仰家で熱心でもあり雄弁でもある人で、大西祝さんも同級だったと思ひますが、此上原さんが或る時ラーネットさんと地方へ旅行したことがあります、何処か途中で渡橋銭を採りましたが、ラーネットさんに持合せがなかつたから上原さんが代替ました、それも一厘五毛とか二厘とかでしたから上原さんは夙くに忘れて了つて居たのです、ところが京都に帰つてから、ラーネットさんは態々礼を述べて、渡橋銭を返却に及んだもの

ですから、上原さんは寧ろ意外な感がし、聊かケチ臭いとも思つて大笑ひをしたそうです、此話を聞いて私自身も何ちらかと云へば、真面目の滑稽を感じ乍ら新島に話しますと、『イヤ、其処がラーネットさんの廉直でいい所だ、実に立派な性格だ、ラーネットさんは経済学にも通じてゐる人であるが、自分の實際生活にも厘毛も苟もしない、実に偉らい。』と云つて大変感心してゐたこともありました。ラーネットさんの廉直と云へば一切の行動が左うでした。夕刻になると、必ず一定の時間を散歩に出掛けます。その筋道がちゃんと極つてゐたやうです。他から見ると、一歩々々踏む地点まで極つてゐるのぢやないかと思はれる位でした。京都の四条大橋に蠣料理の店がありますが、蠣の出る頃になりますとラーネットさんが手頃の鐘に針金を通したものをぶら提げて、これもまた極り切つた道筋を通つて蠣を買求めて了うとまた元の通りの道筋を帰つて行くのです。此処にも先生の規則正しさが表はれてゐます。

× ×

ラーネットさんは本を読むにも、物を書くにも予定を立てる人です、これ／＼の間にこれだけのものを読了し、何時までの間にこれだけの翻訳を為し遂げるといふ方針が立つと必ず実行する人です、全く先生は間違のない人でした。そういう風ですから人事関係などになりますと、先生は余り融通が利かなさ過ぎると云つて零す人も尠くないやうでしたが、併しそれはラーネットさんが悪るいからではありません。相手の人が自分の都合を中心にして事を運ぼうとするから愚痴が出るのです。結局の道理はいつもラーネットさんにあります。

⑧ 新島先生逸話

新島八重子夫人談

本稿は、新島夫人が在世中、大正六年十二月十一・十二の両日にわたり、思い出づるままを、ぼつりと語られた、先生の逸話とでもいうべきものである。多分それは、先生の存命中に、先生御自身からも、或は、先生の御両親や姉上からも、その時折、夫人がきかされたであろう記憶をたどつて、語られたものと思われる。当時、夫人はすでに古希を迎えて居られ、先生の永眠後、二十七年ばかりも経過していたこととて、その記憶が、必ずしも、ことごとく正確なものであつたとは、いい難いかも知れない。それはともあれ、これは先生に関する夫人の、興味ある談話として、読者諸君に紹介する。

祖先は上州の郷原と申すところで、中島家の弁治と申します。上州安中の藩主板倉家に参つて、段々と用いられるようになりまして、その弁治に一人の子供で、民治というのができました、それが板倉家に仕えて居つたのでございます。それから民治に妻を娶つて、女の子ができましたが、その一番姉が「おくわ」という名で、次女が「まき」三女が「みよ」でございます。それで民治は女子が三人までで、男子がないので大変に落胆をしまして、三女の「みよ」が生まれると、男子の衣服を着せて「三代吉」と呼んで居つたそうでもあります。それから又四番目にも女子が生まれまして、それは「とき」と云う名をつけたのでございます。それでもう男子がないことと思つて、非常に落胆致したそうでございます。ところが五番目に生まれたのが男子で、天保十四年一月十四日の朝に誕生を致しました。

その時弁治は寝て居りましたが、又女の子であろうと思つて、非常に落胆して「また女かネ」といつて尋ねましたところが、今度は坊ちやんで申しましたので、弁治は寢床の中で、男子が生まれたと聞いて「アツ占めた！」といつて手を叩きましたそうでございます。まだお正月の七五三を取らない朝の内でありましたから、その子の名は、自分が「占めたッ」と、七五三があるのとで「七五三太」と、つけておいたのであります。

それから、七五三太は子供の中から、中々豪胆でございまして、何分にも四女の生れた後にできた男子ですから、皆から大変に寵愛されて成長いたし、殊に弁治からは、氣をつけられて育つたのでございます。父は板倉家の御用筆（祐筆）を勤めて居つたので、宅には寺子をとつて、教えて居つたそうでございます。それで七五三太も、七歳の時から父に手習や本を習つたのであります。弟が生まれたのは七五三太が五歳ぐらいの時で、弁治と七五三太と一緒に寢床にはいつて居つた時に、その弟は生れたのであります。その時は、弁治が七五三太に双六振りをしようといつて居つたので、それで、その名を双六とつけたということでございます。

七五三太は八、九歳の頃から、中々両親にはよく仕えましたが、しかし、横着で手に余つた男の子で、その一例を申しますれば、一番の姉の「おくわ」が他家に縁付きまして、里（実家のこと）に参つて、頭巾を忘れて帰りましたので、そうして、その頭巾を忘れたのを持つて行つて、帰りがけの途でありましたが、板倉家の屋敷は、一ツ橋の門内にございました。その屋敷の隅のところに、一間四方位の塵溜がございまして、その塵溜のところ三寸幅位の板があつて、其処に屋敷中の塵を集めて、いつぱいになると、その板の高さが四尺位になつて居つた。そうして姉の頭巾を届けて帰がけに、その板に上つて遊んで居りましたが、

その時は、板がズルズルして居つたものですから、その板は誰も渡れないところを渡つたので、そこから転覆したのです。ところが、その塵溜りのところに杭がございまして、その杭のところ倒れて、目の上から頭のほうにかけて、大きな疵をこしらえましたので、早速医師を呼んで手当を致しましたが、丁度その疵は十六針縫いましたが、医師は余りひどい疵で、手がふるつて縫えませんでした。それで父が傍で見えて、破傷風にでもなつてはいかぬと思つて、父が後の七針は医師の針を持つて、縫つてやりました。(負傷については先生自叙記の記事と符合しないが、参考となすべきである)それで、そう云う横着でありまして、時には屋根に上つて紙鳶揚げをしたり、悪戯ばかりするので、丁度負傷したのを機会に絵を習うことに致しました。それから十一歳の時から先生について剣術を習い始めましたが、兎に角、剣術は十四歳の頃まで怠たらずやつたので、余程上達して居つたように思います。それで、十四歳の夏でありましたが、剣術を習つて帰りがけの時に、板倉家の屋敷の前に床場がございまして、其処で何時でも髪を結わせて居りました。稽古場から帰りに髪を結わせるのでございました。それで床場の男が、元結を切りますと夏のことではあるし、殊に剣術を稽古して汗臭くなつて居つたので、子供でありますから、床場の男が「ああ臭い」といつたそうでございます。そうしましたれば「今日は髪は結わないで、そのままにして帰る」と云つたので、「若様、髪は何時でも結いますから結いましょう」と、床場の若い者がいつたそうであります。ところが「臭い頭をお前に結わすのは、気の毒であるから、結わせない」といつて宅に帰り、それから、稽古道具を下に置いて、二階に上つて自分が独りで鏡に向つて、髪を結つたのであります。その時には自分で鏡をもつて結つたことがないので、櫛の運びをどちらにやつてよいやら、分からなかつたが、ともかくも、自分で髪を結つて二階から降りて来て、姉に向つて「姉さん髪を結つたから見えて呉れ」と申しました時、元結があたりまえに結ばれずして、反対に結ばれて、一方は一分程、一方は二分程元結を残して、実に高砂のお爺さん

の様な鬘をして居つたそうであります。その時姉が裁縫を教えて女の子が、四五人来て居つて、皆から元結の結びようが違つて居るといつて、大変に笑われたのである。けれども、心にもとめずして、平気なもので自分が独りで髪を結つて居つたのであります。ところが、或日夕陽のさすところで、自分の鬘が日影に映つたところを見れば、実に滑稽に自分が結つて居ることが分かつたのであります。けれ共、その後は斬髪となる前迄は、自分が他人に髪を結つて貰つたことは無いそうであります。

それから、七五三太がまだ十一歳の時でございました、アメリカのペルリが浦賀に参りましたのは。その後漢学と武芸の方を稽古いたして居りましたが、また杉田玄瑞という医者のところへ参つて、蘭学を習ひ始めました。

七五三太は十六の歳に、父が大阪の方に勤めに参りましたので、その間、自分が父に代つて板倉家の用筆（祐筆）を勤めて居りました。板倉家に泊り番の時もございましたが、朝一ツ橋から金杉まで、蘭学を学びに通うて居つたのでございます。

それから十八の歳に板倉家の本家（備中松山藩主板倉周防守）に快風丸と云う船がございまして、その船に乗つて、備中玉島まで参つたことがあるそうでございます。その後でしたが、その船でまた函館に行くようになりました。その船に乗ります時に、自分は是非外国に行きたいという望みを持つて居りましたけれども、両親は知りませんでした。それから、函館に行くについて、荷物を捨える時、母と姉が、何時帰るか分らないで、船の中でいる着物は、これこれがあるであろうと思つて、和服を沢山入れて居りましたので、自分がこれを見て、そういうものはいらないということは、自分でいうことはできないので、母と姉の厚意を辱くうけたけれども、そういう余計なものは、自分はいらないという考えをもちながら、荷をこしらえて貰

つて、船に乗つて函館へ参りました。そうして、函館へ行つてから、ニコライ氏の家に参り、自分がニコライ氏に日本語を教へておつた所でございます。それからポーターという英国の商人が居りましたが、その店の番頭に福士豊吉（当時福士卯之吉、後福士成豊と改める。豊吉は誤り）という人が居つて、その人に英語を習つて居つたところから心安くなつたから、その人に、自分が外国に行きたいから周旋してくれるように頼んでおきました。

いよいよ船に乗ることになつたので、ニコライ氏のうちに別当（馬丁のこと）がいたので（当時ニコライは避暑のため不在）その人に、国許から親が大病であるといつて来たから江戸に帰らねばならないので、この鍵はお前に渡すから、ニコライ氏に返してくれと申して（先生はニコライ宅に同居していた）自分の所持品は、そこで皆売払つてしまひまして、そうして、自分がこれまで学んだ書籍と大小（大刀と小刀）を持つたのみで、夜分福士氏に導かれて、波止場から沖の本船に参りました。その時、自分の荷物を大分持参したそうでございますが、福士氏が、こんな荷物を持つて行くことはできないといつたので、大分へらして乗つたそうであります。函館のパツテラと云う船は余程面白い船でございます、福士氏は七五三太を本船に連れて行くために、船が出帆する三日程前から、自分がその船に乗つて漕ぐ稽古をして居つたのであります。それから波止場の船に乗りました時は、町人の姿をして参らねばならないので、武士は前髪のところを狭くしてあげて居つたのですが、武士と見られないために、前髪のところを広く落して、町人の姿に二日前から變つていたそうでございます。その時は夜中に船に乗つたので番士から何者かといつて声をかけられました。福士氏は明朝船が出帆するときでありましたから、本船に忘れ物をして来た福士であると申しましたので、番士はとがめませんでした。それで福士氏は七五三太を船の中に入れてのがれたのであります。本船（ベルリン号）についたとき、人が上つてゆくのを見られてはと思つて、船長が氣を利かして、本船の裏側から本

船に入れてくれました。それから福士氏と別れて、福士氏はひき返し、七五三太は船長の部屋の隅のほうの押入のようになつたとこに押込められて居りましたが、明朝出帆するとき、役人が検査に来ましたけれども、船長が腰をかける下のところに、布をかけたところの中に、小さくなつて入つて居つたので、そこは誰も検査をして見ることが出来ませんでした。それで漸くのがれて、外国に行くことができたのでございます。

さて、船の中に居りまして、最早日本の海峡は見えなくなるので出て見よと云われ、船の中から出て見ましたら、何となく我日本が懐しい思いが致したそうであります。それから船の中では船長の給仕人になつて、船の中で働きながら上海まで参りました。そこで今度は、船を乗換えましたが、その船（ワイルド・ロバ号）で米国に行くまでは、諸処の港に着きますから、一年程船の中に働いて居つたのであります。

前の船に乗つて居りましたときのことです。船長の食べた食器を下げて来て、ボーイを手伝つて居りましたが、桶の中にホークと匙が入つて居つたのが、分らなかつたために、海の中に桶の水と共に投げずててしまいました。その時、支那人のボーイが大変に腹を立てて、私の知つたことではない、それは大変高価の物であるのに、海の中に投げたので船長がどんなに怒るか知れない。けれども、それは私の知つたことではないといつて、支那人がまことに憎々しい顔をして、七五三太に申しました。けれども、七五三太は全く知らなかつたことなので仕方がありません。その時日本のお金で、昔の一分金二枚と二朱が一枚あつたのみでありましたが、それを自分の懐中から持ち出して、船長のところに詫にゆきました。そして、私が過つて貴方の食器を海の中に投げ捨て、償いようもないので、私の懐中にはこれだけしか金がないので、どうぞこれで許して下さいと、その金を船長の前に出しましたところ、船長は笑つてその金を押し返し、もうよろしいといつて許してくれたといふことであります。

また、船中に乗つていた客が、英語で七五三太に枕を持つて来てくれと、手真似で申しましたから、多分枕のことであろうと思つて枕を持つて参りますと、その時どうした間違いであつたか、客がその枕で七五三太をたたいたのであります。七五三太は、日本の武士が外国人に叩たかれては、どうも残念でたまらないので、その外国人を一刀のもとに斬り捨ててしまおうと思つて、自分の部屋に置いてある刀の柄に手をかけましたが、然しながら函館を出る前に福士氏が、此刀は持つて行つても、決して抜いてはならないといつたばかりでなく、自分も国禁を犯して居りながら、外国人を斬つたなれば国と国との問題にもなり、又両親にもそのことがかかつて来ると思つて、刀を抜くの思いとどまつたと申すことであります。

また、大変汚れたものなどを、外人から洗へと命ぜられた時などは、大変に自分が恥辱をうけたように思つたのであります。それを甘んじてしたこともありました。船の中に居る間、これらの仕事をするとき、自分の私服の裏をとりまして、自分で筒袖をつくり、それを着て、朝は六時から晩の六時まで働いたので、その長い間働くについて、こう云う仕事をしていて、何時自分の目的を達することができるであろうかと思ひ、船の中で嘆息をもらしたことも屢々であつたとのことであります。

かくして、船はようやくポストン港に着きました。ところで、ポストンに着く前のことであります。船の中に居りまして、煙草が非常に好きでございまして、働きを仕舞つた時に、煙草を喫むのを楽しみにして居りました。それで十五分間位時間を費して、一日の疲れを休めていたわけですが、自分が船の中でつくづく考えましたのは、他日陸へ上がつて勉強するとき、煙草を喫むために時を費すということは、大いにつましまなければならぬことだと思ひまして、船に居る間に喫煙は廢してしまいました。さてポストンに着きましてから、まだ一度も陸を踏んだことがないので、陸に上がつて来いといわれ、陸に上がったのでございま

すが、或る店屋に大きな雁首の煙管があつたので、それを五錢で買ひまして、また板になつた煙草も五錢で買ったのであります。それから船に帰つて参りましたところ、船に居る人が、此処に泥棒が来たりなどするから、よく番をして居れ、私等は陸に上がつてからと云われ、七五三太は船の番人に残されたのであります。陸の方を一人で眺めていると、大変よい景色であつたので、さい前の煙草をポケットからとり出して、そうして煙草の雁首に一枚つめて、陸を眺めながら煙草を喫んで居りましたが、その時フト自分に気がつきましたのは、勉強するのに煙草など喫むために費す時を非常に怖れて、煙草を喫まないことにしたのでどうして陸に上つたとき煙草を買つたのか、自分ながらも大変に意志の薄弱なことを感じまして、こういう薄弱な意志で将来自分の志を達することはできないと自分を深く恥ぢて、買つて来た煙管を二つに折つて煙草も一しよに、海中に捨ててしまいました。そうしてその時以來、日本に帰つて永眠するまで、煙草は一切喫みませんでした。

其二

本稿は新島夫人が在世中、大正六年十二月十一日、十二日の両日にわたり、思い出するままを、ぼつりぼつりと語られ、それを筆記せられたもので、当時、夫人はすでに古稀を迎えておられ、先生の永眠後二十七年を経たことである。筆記者は不明であるが筆跡は女子と察せられる。和野紙二十七枚にペン書きのものである。(同志社新島資料)

明治の八年の十月十五日に、私が新島の方へ参る約束をして、明治九年の一月三日に結婚致しました。私
が新島へ参りました時には、学校は建つて居りましたが、その学校の維持上については、いろいろな困難が

ございました、一度はモウ学校が無くなるかとも思ふようなことが、ございましたけれども、自分は中々屈しませんで、この学校は私の手でするものではなくて、神の手でせられることであると申しまして、心配のうちにも、望をもつて、学校を維持することに、いろいろと奔走いたしましたのであります。

その時分の学校は、私の只今居ります所で、元高松という華族さんの家でありまして、その座敷を借りて学校を開いたのでございます。が、明治九年になつて、今の同志社の地所に移つたのであります。学校を始めました時分は、まことに微々たるものでありますから、自分が校長も事務員も、一人でやつて居つたようなわけでございます。その頃のことではありますが、京都府のほうから、用談があるから、出頭せよといつて参りましたので、例へば九時に出頭せよといふことなれば、正九時に参るのであります。けれども府の役人は、一時間近く待つても、まだ出て来ないので、そのまま帰宅いたしましたのであります。このようなことが、二度も三度もあつたのでございます。そんなことで、その後は、府のほうでも時間を励行するよゝうになつたと覚えて居ります。

明治二十年の六月に、仙台の東華学校の開校式に列するため、仙台に参り、それから札幌に往つて一夏を過ごしたのでありますが、その途中に、函館に参りましたときのことでございます。元治の元年に、そこから船に乗つて外国へ出たところが、どうなつてゐるかと思ひまして、その場所をたづねるため、私と二人で参つたのでございます。ところが、その海浜は、元治のときと余り變つて居なかつたのでありまして、波止場のほうに参りますと、その右側にポータという人の家が、その時分にまだございました。昔は函館のポータ商会といへば、かなり知られていたそうではありますが、その頃と、まだ余り變つておらず、自分が此道を往くとき雪駄をはいていたので、その音が人に聞えては困ると、ぬいだことなど私に語つてくれました。そ

うして、その波止場の右側の方に、ポータ商会というのがありました。当時は、全く昔の面影はなくなつていて、まことに荒れはてて、ただ名前だけが残つて居りました。それから、二人でその家を訪ねましたが、それはそれは、みじめになつて居つたのでございます。これが昔のポータ商会であつたのかと驚いたほどであります。それから、取次を頼みまして、家の中に入つて見ますと、二階の隅の方の一室だけの所に、ポータと申します英人が住んで居つたのでございます。その時、以前の面影を残して居ると思はれたものは、大きな大理石のテーブルなどで、寝台の上に、ビロウドか羅沙地かで作つた洋服を着た白髪のお老人が、横になつて居りました。そうして、新島が名刺を出しますと、その老人は、何用があつて訪ねたのかと申しますと、新島は、私は貴君にはまだ挨拶はしたことがありませんが、私は貴君をよく存じて居ります。その仔細は、貴君の店にいた福士という人に、私は度々英語を習いに来たことがあり、また福士氏の手引きで船に乗つて外国に参つたのであるが、その後、日本に帰国して、今ではまだ小さいけれども、京都に同志社という学校を開いて居る。これも全く、貴君の店にいた福士氏の親切によるのであります。私はそんなことで、永年此処に参ることは出来ませんでした。今日昔の思出深い波止場に来て、はからずも、貴君のお名前が書いてあるのを見て、大変に懐かしく思い、それで訪ねたわけですと、申しましたところが、その老人の申されるのは、自分の商売は、あの時分は栄えて居つたが、その後、だんだん店が衰え、店員も皆持逃げをして、その頃の番頭や店員も、今では自分よりも栄えて居るようだ。自分は此町に今に至るも暮らしてはいるが、誰も訪ねて来てくれるものはない。それなのに、自分の店に働いて居たものに、世話になつたという貴君が、学校を建てるようになったといつて、私を訪ねてくれたことは、まことに嬉しい。老人はこのように申しまして、涙を流して喜んだのであります。それで新島は余りみじめな有様に、気の毒に思ひまして、牛乳でも買つて飲んで下さいといつて、新島は幾らか金を包んで老人に渡し、そのポータ氏に別れました。

襄は、平素はじよう談は少しも言わないで、極く真面目のほうでございまして、食後などに、宅の縁先を運動して居りましても、何の話もいたしませんでしたが、ただ、何か自分の心が屈しました時など、どういう意味かは存じ上げませんが「雲は泰嶺に横たわり家はいづこにか在る。雪は藍関を擁して馬は前まず」（韓愈が潮州に左遷せられたとき途中で甥の韓湘に示した詩）という詩を、いつも口に唱えて居りました。又或時は「英雄起らずんば神州を如何せん」ということも、しばしば繰り返して申しますので、私が、その英雄は、わが同志社から出るのでしょうか、と申しますと、大麥喜んで「勿論」といつて、椽側でドンと足踏みましたことがございました。

襄は、自分が心の屈した時でも、また困った時でも、人に告げることは余り致しませんでした。それで学校などで、いろいろな事がありましても、何にも申しませず、ただ額に筋をたてて、面白くない顔をいたして居りますので、私はそんな時には、度々こういうことを申しましたのであります。「今日は雲行がわるいから、雷が鳴りましようか？」すると「この好い天気はどうして、そういうことを申すのであるか？」とききますので「今日は、あなたのお顔に雲がかかつて居りますから」と答えますと、それで笑つてしまいました。

襄はお蕎麦が至つて好物でございまして、少し気分の悪い時には、いつもお蕎麦を食べることにして居りました。それから、外国の教師を雇うときには、いつでも京都府のほうが大変に手続がむづかしいので、その都度自分で東京へ出かけて、その許可の運動をしないと免状が下りなかつたのでございしますが、その頃は、只今とはちがつて、汽車がありませんでしたから、船でもつて往復いたしましたのであります。その船での

往復は、二等の船客になつたことはなく、いつでも三等ばかりに乗つて居りました。

其三

その時分の衣服などは極く粗服を着けておりまして、同志社の卒業式は、いつも六月でありましたが、その時に着用するフロックコートは冬着まするのを置いておりましたから、どうも六月のことで、暑くてたまりませんので、何か都合して、夏のフロックを一着あつらえたいと申しました、そうして金を少し残しておりました。当時はそれでもって、夏のフロックコートを新調する積りでおりましたが、その時或る人が自分の職をやめることについて、大変困つておられました。自分は六月頃に、冬のフロックコートを着ておつても、それは卒業式の時だけであるから、二時間か三時間の暑さを辛棒すれば、別に新調する必要はないと申しまして、その貯えておいたお金をその人に与え、そうして自分は死ぬるまで、夏のフロックコートは、持たないでしまいました。しかし、その人は今は余程よい地位に立つておられますけれども、裏が死にましてからは、年始の手紙もよこさぬようになっております。自分は人に恵んでも、人から恩を返されぬことなど、別に苦にもしないばかりでなく、そのようなことは人にも話さないで秘しておりますから、自然そのようなことは、ちよつとも人には知られないのであります。

それから宗教のほうについては、日曜学校ということを初めて致しまして、子供たちにいろいろなことを教えておりましたが、その時自分が申しまするに「このことはよろしい事だから、きつと仏教のほうでも始めるに相違ない」と云いましたが、果せるかな、近頃は仏教のほうでも、そういうことが大變行われるようになりました。

また、或る書生のうちで大変に学問のよく出来る人がありましたが、しかし、どうも意志の弱い人でありましたので、その人のことを評しまするに、学問はよく出来るが、あの人は末は遂げられないであろうと申しましたが、やはりその人は失敗ばかりして、憐れむべき末路になりました。その人はまだ生存ですが、わたしは襄が先見のあったことを、今になって感心しております。

襄は極く憐れみに富んで居りましたから、わが家のくらしかたなどは、成るべく儉約のできるだけは儉約して、自分の及ぶ限りは、困った書生などにみつぐようにして居りました。それは昔自分が難儀をして勉強した経験がありますので、そのことを忘れないためであるといっておりました。また米国の友人から自分のために使うようにと金を送られましても、その金でもって書生を助けたり、或はまた伝道師などに与えまして、自分のためには一厘も使ったことはありません。これがため、今は相当な地位を得ている人も、幾人かあるようです。

襄は子供のときから親にいつつけられたことや、或はまた自分でこうしなければならんと思ったことは、よく守っております。一例を申せば、母が襄の子供のとき、忍ばずの池に入って大変苦しんだ夢をみましたので、母が申しますに、お前は水難に遭うかもしれないから、水泳はやめてくれといいましたので、水泳の稽古はしなかつたそうです。それで襄は水泳はできなかったものであります。アメリカで勉強しておりますとき、或る夏休みを利用して田舎のほうへ旅行しましたところ、夏の暑いときのこと、別に着替も所持しなかつたので、途中川の流れで自分のシャツを洗って、それを岸の岩の上に乾かしておいて、流れにつ

かつておりましたところ、いつの間にか深いほうに流されたので、忽ち溺れてしまいました。これを岩の上で見ている人は驚いて、川の中に飛びこみ、ようやくにして裏を救うてくれたのであります。そうした場合助かろうと思つてあわて騒ぐと、よく共に沈んでしまふそうですが、そのとき裏は少しもあわて騒がず、無事に救いあげられたのでありますが、救つてくれた人は、裏が少しもあわてないで落着いていたので不思議に思つて、そのわけをききましたので、イヤ私はまだ死なないつもりでいたのだと答えたそうでございます。

それからまた或ときのことであります。山路にさしかかったとき、その山の麓に一人の老婆がおりましたので、此山を越えて向うの村へ出るのには、どのくらい時間がかかるかと尋ねましたところ、老婆がそのとき、これこれの時間がかかるが、この山の奥には恐ろしい獣がいるから、用心するがよいと申しましたので、裏は太い棒を一本用意して山の奥へ、だんだんと入つて参りました。すると一人の樵夫（きり）みたような男にであつたので、その男に、この山の奥には恐ろしい獣がいるそうだが、それは何であろうか、君は知つていなかるとききますと、それは一体誰がいったのだと問いますので、麓の老婆から聞いたのだといいましたところ、それは自分の母であるが、少しく気が変になつてゐるのだといつて、大笑いをいたしたそうです。

さて、それから山を越えて、次の村に往つたのであります。其の村に牧師さんがおりましたので、その牧師さんに添書をもらつて、またその次の村へ行き、そうして本を売つて旅行したのであります。だが中には、その本ならば持つてゐるといつて、断られることもあつたそうです。また、中には大変親切にして本を買つてくれるばかりでなく、お前が日本の話をしてくれるならば、旅費ぐらいつくつてやると申して、村人を集めたので、日本の話をしてきかせ、日本婦人の絵だの、仏像などを画いたりして金を得て、それでもつ

て旅行を続けたこともあるそうです。

そのようにして旅行しているうちにも、宿にこまることもありまして、或時の如きは、農家の人に頼んで、枯草を入れるところに、とめてもらったことがあるそうですが、風呂敷を頭にかけて眠って、夜が明けて見ると、その上に鶏が沢山とまっています、その糞がかかっていたのを発見して驚いたという、奇談もあります。だがまた或るところでは、お前は人間だから草小屋などで寝るべきでないといって、立派な室に通して、食を与えてくれ、家内にオルガンなどひかせて慰めてくれ、その上、四五哩もあるところまで馬車にのせて送って貰ったこともあるそうです。

このようにして、各地を旅行して居りますうちに、人情の深い人にも、或は極めて薄情冷淡な人にも接した経験がありますので、自分もできるだけ、人には親切にしてやらなければならないと、平素から思っています。

其四

子供のときのお話であります、十二才ばかりのときに、撃剣の寒稽古をして、その三本勝負に勝ちたいと思つたので、虎の門の金比羅様に行つて、今度の三本勝負にはぜひ勝てるようにして下さい、もし勝つことができたらならば、きつとお百度をふみますという願をかけたそうです。それから、その寒稽古の最後の日に、幸いにも三本勝負に勝ちましたので、家に帰つてくると、直ぐさま室内に入つて何か始めました。これを見ていた姉は、不思議に思つて、そつとのぞいて見ますと、しきりにコヨリをこしらえておつたそうです。それから、そのたぐさんのコヨリをもつて外に出てゆつたそうです。これを見た

姉は、奇妙なことをすると思つておりましたが、裏が帰つて来たときに、お前さんはどこへ行つたのですと
ききましたところ、自分は撃剣の三本勝負に勝たしてもらうように虎の門の金比羅様にお百度詣りの願をか
けておいたから、百本のコヨリをこしらえて、その願を解きに行つて、お百度をふんだのだと答えたそうで
あります。そのとき、自分の感じを話して、もう決してこういう願はかけまいと思つた、八十遍歩く間はそ
れほどには思はなかつたが、残りの二十度がまことにつらかつた、もう生涯のうちに、このような約束はす
まいと決心をしたと申したそうであります。裏は、何でも自分がしようと思つたことは、正直に実行してい
たと、姉が語つておりました。

これは十五才ごろのことですが、裏はタバコが好きで、いつでもタバコを吸うておつたそうであります。
そうして火の用心と書いてある、革のタバコ入れに煙管をちやんと用意して、一ツ橋の家から金杉まで蘭学
の稽古にもそれを持つて通うておつたということでもあります。ある時のことでありますが、妾ども二人が同
志社の学生の演説会にまいりましたとき、一人の学生が大きな靴をはいて、演壇にのぼつて演説をいたしま
した。妾はその様子が如何にもおかしかつたので、思はず笑いましたところが、裏が申しますに、自分は彼
よりも、おかしなかつこうをしていたと思う。少年のころ蘭学の稽古に通うときアメリカ人のはいていた古
靴を買つて、それにタビもはかないで、その大きな靴をはき、大小の刀を二本腰に差していた。これは彼よ
りも遙かにおかしな姿であつたと思う。あまり笑つてくれるなと申しました。

それから十七八才のころと思います。裏は蘭学の字引が、どうしても買いたかつたのでありますが、中々
家のほうでお金を出してくれません、それで、ある日だまつて家のお金を八円ばかり持ち出したのでありま

す。その時分のお金で八円といえ、まあ相当なお金でありましたが、裏はそのお金を出すときそのお金入れの中に、しばらく借用するという意味の書付けをそつと入れておいたそうでございます。ところが、ある日のこと入用ができたので、母がそのお金を出そうと思つて、お金入れを見ると、お金がございます、いつの間にかなくなつておりますので、家内中大騒ぎとなりました。そのとき祖父が、うちには若いものがないのだから、あまり大きな声で騒いでくれるな、七五三太を呼んで、きいて見ればわかるだろうと申しました。裏は呼ばれたとき、いよいよわかつたと思ひながら、買つた字引をもつてきて祖父からきかれるままに、私はその金をたしかに使いました。だが、あの金入れの中には書付けを入れておいたはずです、多分入つているだろうからあらためて下さいと申しましたので、祖父がしらべて見ますと、しばらく借用するという書付けが入れてあります。そこでまた祖父にそのお金は決して悪いことには使つておりません、この通り字引が入用であつたから、それでこれを買つたのであります。といつて祖父に字引を見せたので、祖父は手をつたいて大変に喜びましたが、それならば、なぜそのことを一言わなかつたのだときかれ、裏は、字引を買いたいといつても、どうせ父母が承知してくれないだろうと思つたからだと答えたそうであります。

裏が若い時代に、ある時友人と王子のほうへ桜見に参つたことがあります。ところが、そこに桜一枝折れば一指をきるといふ意味の高札が立ててございました。裏はこれを見たとたんに、刀を引き抜いて、そこにあつた桜の枝をきつたので、桜見に来ていた人々は、酔どれがあばれるのだらうと、危険を感じたものか、みんなおそれて遁げたそうあります。ところが、その遁げるのが面白くて、大分桜の枝をきつたということでもあります。しかし、若いころのことで、そのようなことは、自分もすっかり忘れておりました。それから後年になつて、同志社大学の設立主意書を新聞に発表しましたとき、昔の塾友であつた多田野信とかい

人から、一通の手紙がきまして、大学発表の主意書によれば、新島襄とあるが、貴君の旧名は、あるいは新島七五三太と申されるのではあるまいかお尋ねすると、書いてありましたので、襄は早速その人のところに、久し振りに返事をしたため、たしかに自分は七五三太であるが、現在は襄に改めていると申してやりました。すると、その多田野という人から、こんどは一枚の写真を送つてきました。そうしてその裏面に、王子の旧遊を君記憶しているか否、といったようなことが書いてありました。その昔王子に桜見にいつしよに行つた塾友であつたのでございます。襄はその写真をうけとつたときに、若い時代に自分が粗暴であつたことを、悔いておりました。

いつごろのことであつたか、ある生徒が校則を犯して、京極の寄席かなにかにまいつたことがありまして、それがわかつたので、一週間ばかりの禁足を申渡され、その生徒の名前が、学校の掲示板にはり出されました、ところが、ある朝掲示板を見ると、その生徒についての楽書が書いてありましたので、襄は朝の礼拝に集まつたとき、講話の中に、外国である未亡人が独り息子に死なれ、その家は非常に貧しかつたので、葬式のときに、誰れも送つて行つてくれるものもなく、雨の降る中をただ一人母親が送つておると、その有様を氣の毒に思つた見知らない人が、自分もともに送つていつた。これはまことに同情の深い感心すべきことである。しかるに、わが校の一学生が校則に違反したため、一週間の禁足を申渡されたが、これに対しては、お互いに同情をしなければならぬはずであるのに、如何にも、その罰が軽いかの如く楽書をするということは、同情なき冷淡な行爲である。いったい何人がこのようなことをしたのであるか、したものはお立ちなさいと厳しく申しました。けれども、たれ一人として私ですと名乗つて起立するものがありませんでした。そこで今度は、自分ではないと思ふものはお立ちなさいと申しますと、全員が起立いたしましたので、それなら

ば、多分他から何者かがしたのであろう、掲示はなお三日ほど出しておくはずであるが、引込めるといつて、とつてしまいました。それから宅に帰つて来ましたとき、同情心の少ないことをいつて、将来のことを大変憂いておつたことがあります。